マタイ 16:24、エフェソ 1:3-6、17-18「制限と無限」

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」

「わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、前もってお定めになったのです」

「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるように。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように」

わたしたちは、なかなか自分の思い通りに行かない、という経験を、いつもさせられております。わたしは「こうしたい」「こうあるべきだ」「こういうやり方があるはずだ」　そうは思っておりましても、前に立ちはだかる人が必ず出てまいりまして、妨げられます。制限せられます。それじゃあ駄目だ、と言われます。理不尽な！　何でそういうふうに言われるのか、理解できない！　この、理解を超えている相手のことを「他者」というふうに申します。他人、と言いましたら、ちょっとつき離した存在、という感じがいたしますが、他者、と言いましたら、これはもうちょっと、理解を超えた存在、通じない存在、ということになります。

で、この他者というものが、自分の前に立ちはだかって来る。わたしは「こうしたい」というところへ、駄目だ、って言う。わたしは「こうあるべきだ」というところへ、駄目だ、って言う。「こういうやり方があるはずだ」というところへ、駄目だ、って言う。この「わたくし」というものを、ことごとく切って切って、押し込めて、制限しようとして来るのが、他者というものであります。

しかし大事な点は、わたしたちは、こうやって他者によって制限されていることでもって、自分というものが出来ているんだ、ということであります。自分とは何かと言ったら、それは、他者によって限界づけられているゆえの自分で

あります。

創世記第 2 章を見ますと、神様がどのように人間をお造りになったか、ということが書かれてある。最初そこへ、泥がいっぱいあった。その泥の一部を取って、かためて、泥をこそげとって、そうして人間のかたちにした。そこへ神様は命の息を吹き込まれて。こうして成ったのが、わたしたちであります。じゃあいったい、そこへあった泥を際限なく全部かためたら、人間になったんだろうか。そこへあった泥を際限なく全部かためたら、それは、巨大な泥のかたまりのお化けであります。全部じゃない。一部を取ったんだという。その一部をかためたんだということ。かためたものから、さらにこそげ落としたという。そうして、わたしたち人間が成ったのであります。制限せられているがゆえの、自分であります。

大友克洋監督の「アキラ」というアニメ作品がありますけども、それに鉄雄という超能力を持った少年が出てまいります。鉄男は超能力が爆発的に目覚めまして、もう無限と言ったらいいほどの力をふるうようになります。無限の力をふるうっていうのは、結局のところ、自分を抑えようとして来る者、自分を制限しようとする者、つまりは、まわりの者たち全部を、力をふるって殺してしまう、ということなんです。そうして、力をふるえばふるうほど、鉄男の肉体はぶくぶくと膨張し、増大して行きます。その膨張といったら、とどまるところがありません。最後には、巨大な肉のかたまりのお化けのようになってしまいます。わたくしというものが他者によって制限せられるということが、まったくなくなってしまったら、われわれはもう人間でなくなって、お化けになってしまうという、それを非常に絵画的に描いているのが、「アキラ」というアニメ作品であります。

だから、自分が他者によって制限せられているという、これは当座は喜ばしくないことなんだけども、しかし、制限せられているということがまた、自分を自分たらしめているところの、自分を人間たらしめているところの、ほんとうに重要なことなのだ、ということでありまして、この他者によって制限せられているということを内面化したものが、すなわち、「わたしの十字架を背負う」ということであります。

イエスさまは「自分の十字架を背負って、ついてきなさい」とおっしゃった。わたしたちが十字架を背負って行くっていうことが、イエスさまの御心です。それが、イエスさまがわたしたちに求めてらっしゃることです。十字架を背負

うんだ、ということ。わたしは「こうしたい」「こうあるべきだ」「こういうやり方があるはずだ」ということが、山ほどございます。たくさんの「わたしが」「わたしの」「わたしを」「わたしに」がございます。でも、そういうたくさんの「わたしが」「わたしの」「わたしを」「わたしに」が、ことごとく制限せられる。他者によって制限せられる。それは、当座は悲しくもあり、つらくもあり、苦しくもあり、さびしくもある経験ですが、しかし、そうやって制限せられるということが、ほんとうのわたしには、どうしても必要なんだということ。十字架を背負うことが、イエスさまの御心です。

そうして、十字架を背負うというのは、よろめいてみて、はじめて十字架だ、ということです。背負ってみて、全然よろめかないんだという、そんなんであっては、十字架だとは言えません。わたしたちの人生の経験の、いったいどれが十字架であろうか。判断してみるに、「よろめくかどうか」というのは、重要な点であります。イエスさまは十字架を担って悲しみの道を行かれたときに、何度もよろめいてお倒れになりました。わたしたちだって、ぜんぜんよろめかないというんだったら、そりゃ十字架じゃない、ということになります。

こうやって、いろいろ十字架を背負って、よろめいているわたしたちでありますけども、しかし今日のエフェソ書の御言葉に、「天のあらゆる霊的な祝福がわたしたちのために用意せられている」んだという。天には、わたしたちのために、無限の祝福がある、と言うんであります。これはなんだかずいぶん矛盾しているんじゃないか。一方で、わたしたちは自分が制限せられるという、十字架を背負っております。その一方で、いっさい制限がない、無限の祝福が、わたしたちのため天に用意せられているんだという。この制限と、この無限であります。制限と無限。これは矛盾してるんじゃないだろうか？

矛盾していないんであります。神様の祝福というものは、十字架というものと、完全に合致しております。神様の無限の祝福というのは、わたしたちの制限、わたしたちの十字架という制限と、完全に合致しております。祝福は十字架と一致したかたちで働く、ということであります。

神様の無限の祝福というのは、何かこう、わたしたちを増長させて、肉のかたまりのお化けにさせるというものではない。神様の無限の祝福というのは、わたしたちが自分の十字架を取ってイエスさまの御足跡について行くとき、そこへ働いてまいります。神様の祝福は、十字架を担うわたしたちの内に外に働きまして、わたしたちをイエスさまに似た、うるわしい人へ造り変えて行かせる

ものであります。

だが、祝福、祝福、と言っても、ちっとも祝福なんて感じられないじゃないか。そういうふうにおっしゃる向きもあるかしれない。

ここに秘密がありまして、いったい祝福というのは、それと認識せられないうちは、わたしたちの側で、これといって感じられないものであります。祝福というのは、わたしたちがそれと認識する前は、「恵み」というかたちで存在しております。「恵み」というのは、私たちと、いつも、たえず、つねに、共にあるものであります。もう、そこいらじゅうにある。どこにでもある。いつでもある、というのが「恵み」であります。しかも「恵み」は、見えないもの、感じられないものであります。

スターウォーズという映画の第 2 作目におきまして、主人公のルーク・スカイウォーカーがシャングルの惑星ダゴバで修行する場面が出てまいります。修行を指導するのが、マスター・ヨーダという緑色の小人なんですけれども、マスター・ヨーダは人間の目には見えない不思議な力「フォース」について、教えるのです。「フォースは、あそこにある。ここにもある。そこにも、そこにも、おまえと石の間にも、おまえとわたしの間にも、どこにでもフォースはある」

神様のお恵みというのは、これと似ております。神様のお恵みは、いつでも、どこでも、たえず、つねに、わたしたちを取り巻いている。わたしたちの内に外に注がれている。イエスさまが十字架にかかってくださったというお恵み、身代わりに死んでくださったんだというお恵み、それによって罪が赦していただけるというお恵み、三日目に復活なさって永遠の命を与えてくださったというお恵み。こういうお恵みは、わたしたちが知っていようと、知らずにいようと、わたしたちが認識しようと、気づかないでいようと、わたしたちのすぐそばに、手を伸ばせばすぐつかめる目の前に、いつでも備えられているお恵みであります。さらにまた、太陽の光が照らし、雨が大地を潤し、さまざまな美味しい食べ物が備えられ、胸いっぱい空気を吸い、こうして生きていることができるという、こういうお恵み。これは、万人に例外なく与えられているお恵みという意味で「一般恩恵」と呼ばれますけれど、こういうお恵みが、わたしたちを取り囲んでいる。そこらじゅうお恵みだらけです。

しかも、わたしたちは、お恵みにまったく気がつかない、ということがある。気がつかないどころじゃない。実にわたしたち日本人の 99 パーセントは、イエ

スキリストの救いのお恵みを知りません。万人に対していつでもずっと提供せられているお恵みだけれども、日本人はそのお恵みに気がづいていない。

だが、ひとたび恵みに気づいたならば、ひとたび恵みを認識し、恵みを恵みとして味わい、自分の身の上に恵みを体験したならば、恵みは「祝福」となります。恵みが人間によって認識せられると、それは祝福となるのです。

祝福が無い、ということがある。祝福が無いんじゃないだろうか、と思わざるを得ないことがある。だが、ほんとは祝福が無いということじゃない。わたしたちが、お恵みを認識し損なっているだけだ。お恵みを認識し損なっているから、この身に祝福を実感できない、というだけのことであります。

だから、わたしたちにとって一番重要なのは、目が見えるようになる、ということであります。パウロはこう祈っております。

「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の源である御父が、あなたがたに知恵と啓示との霊を与え、神を深く知ることができるようにし、心の目を開いてくださるように。そして、神の招きによってどのような希望が与えられているか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか悟らせてくださるように」(エフェソ 1:17-18)

この「目が開かれる」という祈り。開眼の祈りが、必要であります。わたしたちの心の目が開かれて、わたしたちを取り巻いているところの無限のお恵みを、きちんと認識することができるなら、わたしたちは無限の祝福をこの身に実感をもって味わうことができるようにせられるのであります。

わたしたちが恵みを認識しますと、それは祝福となり、祝福を感じますと、感謝の思いが心にわき上がり、こうして、わたしたちは神を賛美するようになります。それは実にパウロがこう言ってるとおりであります。

「神が愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです」(エフェソ 1:6)

どうかわたしたちの心の目が開かれますように。そうして、恵みを認識することができますように。そのようにして恵みが祝福となって、わたしたちの体験のうちに実現せられますように。かくしてわたしたちの心のうちに賛美と感謝

が満ち溢れますように！

最後に申し上げたいことは、この「祝福の現実化」ということに関して、あの人とこの人、あの人とわたしとの間に、どうも差があるんじゃないか、というふうに見えることがある、ということであります。

ウェリントン・シタデル・バンドが二度目の来日をしました折に、わたくしは会場係として裏方のご奉仕をさせていただきましたけれど、ウェリントンの楽隊員は、わたくしにはウェリントンのバッジをくれないで、隣りで奉仕していた婦人士官だけにくれました。それをそばで見ておられた朝野中将が「うん、うん、お恵みというのは不公平なものだよ」とおっしゃったのが、いまでもずっと忘れられずにおります。

たしかに、あの人とこの人、あの人とわたしの間に、この祝福せられるとういことにおいて、どうも差があるんじゃないか、ということでありますが、これは素直なわたしたちの認識であります。

で、思い出していただきたいことは、神様の祝福、無限の祝福というものは、決してわたしたちを増長させ、わたしたちを肉のかたまりのお化けにするというふうには働かない、ということであります。

神様のお恵み、神様の祝福、無限の祝福というものは、わたしたちがイエスさまに似た者となるように働くのでありまして、そのために一番良い時、一番良い場所、一番良いタイミングで働くのであります。わたしたちが増長し、わたしたちが肉のかたまりのお化けになるというふうには、神様の祝福は働きません。

このために、ぱっと見た目で、あの人とこの人、あの人とわたしとの間に、祝福の差があるかのように見える。でも、すべての人に、神様のタイミングにおいて祝福が実現化してまいります。最終的には、わたしたちはみんな天国に行きますけれども、天国に行きましたら、みんなの間で祝福の差というのは、ちっとも無かったんだということが、わかるでありましょう。しかし、天国へ行く前におきましては、一時的ではあるにせよ、祝福の差があるように見えることがございます。

大切なことは、第一に、わたしたちは他者によって制限されているゆえの自分

であるということです。「わたしが」「わたしの」「わたしを」「わたしに」が他者によっていろいろとこう制限せられるという、こういう制限が自分を自分たらしめている大切なことであって、決して悲観してはなりません。むしろ、感謝すべきであります。
第二に、わたしたちが制限せられているということと、神様の無限の祝福との間には、何の矛盾も無い、ということであります。神様の祝福は、わたしたちの制限、わたしたちの限界、わたしたちの十字架と、完全に一致し、完全に調和しております。神様の祝福は、わたしたちが主イエスに似た者となるように働きます。
第三に、無限のお恵みが、いつも、たえず、つねに、共に、わたしたちを取り囲んでおり、わたしたちを覆っており、わたしたちの内に外に注がれている、ということであります。しかも、わたしたちは、お恵みを認識し損なうということがある。手を伸ばせば届くほど近くにお恵みが備えられておりながら、まったくそれと気づかない、ということがございます。
第四に、わたしたちの心の目が開かれることが肝要であります。ひとたび心の目が開かれましたら、お恵みをお恵みとして認識せられるようになりまして、お恵みをお恵みとしてきちんと認識せられますと、それは「祝福」として実感せられます。祝福が実感せられますと、もうわたしたちの内に感謝と賛美の念がわきおこってまいります。うれしくって仕方がない、楽しくって仕方がない、神様を賛美せずにおられない、という感覚であります。

この境地を、G.K.チェスタートンは、こう表現いたしました。「イエスは弟子たちに三つのことを約束なすった。まったく恐れがなくなること。無性に幸せでしかたないこと。いつでも試練が絶えないことである」

まずどうか、このわたしがいろいろと制限せられている、ということを、神様に感謝いたしましょう。次に、制限せられているこのわたしに、神様の無限の祝福が用意せられているということを、信じましょう。さらに、神様のお恵みが、いつでも、たえず、つねに、共にあること、われらの内外に神様の無限のお恵みが注がれていることを、信じましょう。その上で、自分の心の目が開かれるように、心の目が開かれて、気づかなかったお恵みを、お恵みとして認識することができるように、祈りましょう。お恵みをお恵みとして認識することができたならば、それは祝福となります。祝福は実感せられるものです。祝福が実感せられますと、賛美と感謝の思いが心にわき起こってまいります。ハレルヤと叫んで、その喜びを表しましょう。お祈りいたしましょう。